

はじめに

本テキストは、皆さんが無理なく基本をマスターし、かつ応用力を養成できるように編集してあります。

単元ごとに、知識の確認のための基本事項とプラスα、それを定着させるための例題があり、さらに問題を解く力を確実にするために、演習問題Aと演習問題Bが段階を追って配列してあります。また、分からない問題がでてきたら、すぐに基本事項や例題に戻って、新出の文法・用語などを確認し、その使い方を見ることが出来ます。

古典は知識の積み重ねが不可欠な教科です。本テキストの学習を通じ、基本事項の利用法と正解へのプロセスを体得し、実力を確かなものとされることを願っています。

構成と活用法

本テキストは、次のように構成されています。

▼基本事項

各単元のポイントを、簡潔な説明で示しています。

▼プラスα

基本事項に盛り込めなかった重要事項も示してあります。

▼例題

基本事項で学んだ文法事項を短文で集中的に出題しています。

▼演習問題A

基礎力の再確認を目的としています。解けた場合も、そうでない場合も、正解に至るまでの過程を必ず確認しましょう。

▼演習問題B

長文問題を通しての、応用力の養成を目的としています。基本事項・例題で学んだ文法・用語をどのように活用していけばよいかを考えながら、問題に向かうと効果的です。

▼文法問題演習

演習問題Aと同等の問題を出題しています。知識の定着のために役立ててください。

◆ もくじ — 古典 I

1 用言	2
2 助動詞(1) — 推量「む・むず・じ・べし・まじ」	8
3 助動詞(2) — 推量「らむ・けむ・まし・なり・めり・らし」	14
4 助詞 — 係助詞・格助詞・接続助詞	20
文法問題演習 1 ~ 4	26
付録 — 文語文法要覧	30

基本事項

1 用言 単語のうち単独で述語となり得る、活用のあるもの。つまり、動詞・形容詞・形容動詞をさす。
2 用言の各活用形の用法

未然形 助動詞「ず」「むへん」などが下につく形。

連用形 助動詞「けり」や、助動詞「て」が下についたり、文を途中で切ってまた続けたりするときの形。

終止形 下に何もつけず文を言い切る形。また格助詞の「と(引用)」などが続くときの形。

連体形 体言などが下に続くときの形(係り結びでは「ぞ・なむ・や・か」の結びになる)。

已然形 助詞「ども」などがつく形(係り結びでは「こそ」の結びになる)。

命令形 命令の気持ちで文を言い切る形。

3 活用の種類

動詞 ●四段活用……「言ふ」「聞く」「咲く」「読む」など多数。

●上二段活用……「尽く」「過ぐ」「落つ」「恋ふ」など多数。

●下二段活用……「耐ふ」「受く」「絶ゆ」「植う」など多数。

●上一段活用……「着る」「似る」「煮る」「干る」「見る」「射る」「鏝る」「居る」「率る」など十数語。

●下一段活用……「蹴る」の一語。

●カ行変格活用……「来」の一語、および複合動詞「参り来」など。

●サ行変格活用……「為」「おはす」の二語、および複合動詞「愛す」など。

●ナ行変格活用……「死ぬ」「往(去)ぬ」の二語。

●ラ行変格活用……「あり」「居り」「侍り」「いますがり」の四語。

形容詞 ●ク活用……「高し」など。 ●シク活用……「美し」など。

形容動詞 ●ナリ活用……「あはれなり」など。 ●タリ活用……「堂々たり」など。漢文体の文章に多い。

4 音便

●イ音便……書きて→書いて ●ウ音便……食ひて→食うて

●促音便……打ちて→打つて ●撥音便……飛びて→飛んで

5 形容詞・形容動詞の語幹用法

●名詞+「を」(間投助詞)+「形容詞の語幹」+「み」(接尾語) ↓訳「〜が…ので」。

※和歌の中で使われる。「瀬をはやみ」||川の流が速いので。

●感動詞(あな)+語幹↓「あな、めでた(↑めでたし)」||ああ、すばらしい。

●語幹+の+名詞↓感動表現となる。

「憎(にく)の男や」||なんと憎らしい男であるよ。

ポイント

▽活用形の名は、用法の一部から便宜上つけられたもので、その活用形のすべての用法を表すものではない。

▽動詞の活用の種類の見分け方

上一段活用・下一段活用・変格活用に属する動詞は覚えてしまおう。

その他の四段活用・上二段活用・下二段活用の見分け方は、助動詞「ず」をつけてみて、直前の音がどの段であるかを調べる。

書く+ず↓書かず ア段↓四段活用

起く+ず↓起きず イ段↓上二段活用

受く+ず↓受けず エ段↓下二段活用

▽形容詞の活用の種類の見分け方

動詞「なる」をつけてみる。

高し+なる↓高く+なる ↓ク活用

美し+なる↓美しく+なる ↓シク活用

※形容詞のシク活用では、形容詞の終止形+の+名詞↓感動表現となる。

「を(み)かしの御髪や」||なんと美しい髪の毛でいらっしやるよ。

例題

1 次の活用表を完成させよ。語幹はひらがなで、活用語尾と区別のない語幹は()に入れて記せ。

基本形	語幹	未然形	連用形	終止形	連体形	已然形	命令形	活用の種類
侍り <small>はべり</small>								行 活用
往ぬ <small>いぬ</small>								行 活用
為す <small>なす</small>								行 活用
来く <small>くる</small>								行 活用
答ふ <small>こたふ</small>								行 活用
起く <small>おこく</small>								行 活用
蹴る <small>おこる</small>								行 活用
居る <small>ゐる</small>								行 活用
飲む <small>のむ</small>								行 活用

2 全ての動詞に傍線を引き、終止形をひらがなで答えよ。

- (1) その竹の中に、もと光る竹なむひと筋すぢありける。
- (2) 日数の早く過ぐるほどぞ、物に似ぬ。
- (3) 年ふればよはひは老いぬ……
- (4) ……死なぬくすりも何にかはせむ

3 全ての形容詞に二重傍線、形容動詞に波線を引き、終止形をひらがなで答えよ。

- (1) おもしろく咲きたる桜をながくをりて、
- (2) 南には滄海そうかい漫々として、岸うつ波も茫々ぼうぼうたり。
- (3) 世になくきよらなる玉のをの子御みこ子さへ生まれ給ひぬ。

ポイント

1 動詞の活用は九種類ある。何度も声に出して読み上げ、リズムをつかむと覚えやすい。

動詞の活用表をおさえるときには、活用語尾だけでなく、「聞か^レズ」「聞き^タタリ」「聞^ク」「聞^ケトキ」「聞^ケドモ」「聞^ケ」のように、下に続く語も一緒におさえていくとよい。そして変化している部分(一線の部分)をまず活用語尾として書きあげ、残った部分を「語幹」としてひらがなで書き入れるとよい。

2 上二段活用、下二段活用の動詞の終止形は、現代語と異なるので注意する。またヤ行やワ行の段の活用には、ア行の活用語尾と誤りやすいものがあるので、注意する。

3 形容詞・形容動詞はどちらも状態・性質を表す。形容詞は終止形が「し」となるもの。形容動詞は「なり」「たり」となるもの。

1 次の(1)～(11)の傍線部の動詞の活用の種類と活用形を答えよ。

- (1) ただ思ふことをかかむと思ひしなり。
- (2) あけぬれば往ぬ。
- (3) 成村、「尻蹴よ」といひつる相撲に、目をくはせければ、
- (4) ……人こそ見えね秋は来にけり
- (5) 人恋ふる我身も末になりゆけど…
- (6) 今日まではことなくなつたひらかに侍り。
- (7) 爪のいと長くなりたるを見て、
- (8) 「いま雨やみて。しばし待て。」
- (9) すこし春ある心ちこそすれ
- (10) 臥しても起きても、涙の干る世なく、
- (11) ……衣かたしき独りかもねん

2 次の(1)～(8)の傍線部の形容詞・形容動詞の活用の種類と活用形を答えよ。

- (1) 言葉少なからんにはしかじ。
- (2) 昔より、賢き人の富めるはまれなり。
- (3) かれをはしたなういひけんこそいとほしけれ
- (4) 人におもはれんばかりめでたき事はあらじ。
- (5) 人なくてつれづれなれば、
- (6) 漠々たる寒嵐の底、旅泊に臥て
- (7) 饗いかめしう仕うまつる。
- (8) 世にながかれとしもおぼさざりしを、

現代語訳

1 (1)ただ思ふことを書くように思ったのだ。

- (2)夜が明けたので立ち去った。
 - (3)成村が、「尻を蹴れ」と言った相撲取りに、目配せしたので、
 - (4)……人の姿は見えないけれど、秋はやって来たのだなあ
 - (5)（亡き）人を慕う我が身の命も残り少なくなつてゆくけれど…
 - (6)今日までは何事もなく平穩にございます。
 - (7)爪がとても長くなつてしまつているのを見て、
 - (8)「すぐ雨がやんで（帰る）。少し待て。」
 - (9)少し春があるような心持ちがする
 - (10)寝ても起きても、涙のかわく時はなく、
 - (11)……衣の片袖だけを敷いて独り寝をするのだろうか
- 2 (1)言葉が少ないのにこしたことはないだろう。
- (2)昔から、賢い人で裕福な人は珍しい。
 - (3)あの人を品悪く（ばかにして）言つただろうことがかわいそうだ。
 - (4)人に愛されることほど素晴らしいことはないだろう。
 - (5)人もいなくて所在ないので、
 - (6)果てしなく寒風の吹く中、旅先で寝て
 - (7)饗応を盛大にし申し上げる。
 - (8)世に長らえよともお思いでなかったが、

③ 「」に示された用言を抜き出しその活用形を答えよ。語幹用法の場合は「語幹」と記せ。

- (1) (動詞・上二段活用) けふの試楽は、青海波に事みな尽きぬな。 []
- (2) (動詞・上一段活用) 人を顧みるよりやすし。 []
- (3) (動詞・下一段活用) さと寄りて一足づつ蹴る。 []
- (4) (動詞・カ行変格活用) この世界にはまうで来たりける。 []
- (5) (動詞・サ行変格活用) ここを人にも知らせず、忍びておはせよ。 []
- (6) (動詞・ナ行変格活用) さいはひなき身と知りて、いかで死なん、 []
- (7) (形容詞・ク活用) 時は六月のつごもり、いと暑きころほひに、 []
- (8) (形容詞・ク活用) あなあぢきなの物あつかひや、 []
- (9) (形容詞・シク活用) 七夕祭こそなまめかしけれ。 []
- (10) (形容動詞・ナリ活用) 青き薄様にいとよげに書き給へり。 []
- (11) (形容動詞・タリ活用) 天心は蒼々としてはかりがたし。 []

④ 次の傍線部の動詞の活用の種類と、語の意味を答えよ。

- (1) かくのみ思ひくんじたるを、心も慰めむと、心苦しがりて、 []
- (2) 思ひ惑はるる人の御心苦しきは、ただ今は慰みて、 []

⑤ 「」に示された用言を適切な形に活用させ、ひらがなで答えよ。

- (1) 「をり」 屋の上に [] 人どもの聞くに、いとまさなし。
- (2) 「為」 あながちに丈高き心地ぞ []。
- (3) 「得」 をとこはこの女をこそ [] めと思ふ、
- (4) 「ねづ」 「」て引くに、大かた痛き事なく、

③ (1) 今日の舞楽の予行演習は、青海波一つに(言うべきことは)みんな尽きたな。

- (2) 人に気を使うより気が楽だ。
- (3) さつと寄って一足ずつ蹴る。
- (4) この人間世界にやって来た。
- (5) ここを人にも知らせず、人目を避けていらつしゃってください。
- (6) 良い運勢のない身とあきらめ、どうかして死にたい、
- (7) 時は陰暦六月の末日、とても暑い時節で、
- (8) なんとつまらないおせっかいだ、
- (9) 七夕祭こそは優美である。
- (10) 青い薄手の紙にとっても美しくお書きになった。

(11) 天の心は蒼々と広がる空のように推し量りがたい。

⑤ (1) 屋根の上にいる人達が聞いているのに、とても聞き苦しい。

- (2) むやみに背が高い感じがする。
- (3) 男はこの女をこそ得たいと思う、
- (4) (瘤を) ねじって引くと、全く痛くなく、

ポイント

- ④ (1) 「思ひくんじ」は「ふさぎこみ」の意。「むへん」は「よう」という意味の助動詞で、その上にある語は未然形となる。(2) 「て」は助詞で、その上にある語は連用形となる。

① 次の文章を読んで、後の設問に答えよ。

「うすものの表紙はとく損^①ずるがわびしき」と人の言ひしに、頓阿^{とんあ}が、「うす物は上下^②はづれ、螺鈿^{らでん}の軸^{ぢく}は貝落^③ちてのちこそいみじけれ」と申し侍^{まう}りしこそ、心まさりして覚えしか。一部とある草子写物^{まきもの}などの同じやうにあらぬを、「みにくし」と言へば、弘融^{こうゆう}僧都^{そうづ}は、「物をかならず一具と調へんとするは、つたなき人^④のすることなり。不具^dなるこそ□□」と言ひしも、いみじく覚えしなり。「すべて何もみな、事の調ほりたるはあしきことなり。し残したるをさてうちおきたるは、おもしろく、いきのぶるわざなり。内裏^f造らるるにも、かならず造りはてぬ所^⑤を残すことなり」と、ある人申しき。先賢^{せんけん}の作れる内外^{ないげ}の文にも、章段の欠けたることのみこそ侍^⑥れ。

(注) ○頓阿＝兼好の友人。

○螺鈿＝貝殻の真珠色に光る部分を使う装飾。

○内外の文＝仏教やその他の教典。

問一 傍線部①～⑥の動詞について活用の種類と活用形を答えよ。

①	□	□	□	□
②	□	□	□	□
③	□	□	□	□
④	□	□	□	□
⑤	□	□	□	□
⑥	□	□	□	□
⑦	□	□	□	□
⑧	□	□	□	□
⑨	□	□	□	□

問二 二重傍線部a～fの形容詞、形容動詞について活用の種類と活用形を答えよ。

a	□	□	□	□
b	□	□	□	□
c	□	□	□	□
d	□	□	□	□
e	□	□	□	□
f	□	□	□	□

問三 文中の空欄にあてはまるように、「よし」を適切な形に活用させて記せ。

問四 「すべて何でもみな、物事の完全に調っているのはよくないことだ。……」と言ったのは誰か。文中から抜き出して記せ。

①

出典

「徒然草」(八二段)

鎌倉時代末期の随筆。吉田兼好著。二四三段からなる。見聞きしたことや自身の思想を中心に書きつづる。「枕草子」とともに、古典随筆文学の代表作品である。

重要古語

- ◇うすもの＝薄い絹織物。
- ◇とく＝早く。
- ◇いみじけれ＝ここでは「すばらしい」の意。
- ◇心まさりして覚えしか＝感心させられた。
- ◇一部とある草子写物＝何冊かで一そろいとなる冊子や巻物。
- ◇一具と＝一そろえに。
- ◇つたなき＝愚かな。
- ◇不具なる＝そろっていない。
- ◇あしき＝悪い。
- ◇いきのぶる＝ほっとする。
- ◇内裏＝天皇の居所を中心とする御殿。
- ◇先賢＝古い賢人。

POINT

問一 サ行変格活用の動詞には「為」以外にも、「漢語＋す」や、「す」が濁って「漢語＋ず」になっているものもある。

問三 直前の助詞に注意する。

② 次の文章を読んで、後の設問に答えよ。

みのむし、いと哀れなり。おにの生みたりければ、親に似て、是もおそろしき心あらんとて、親の、あやしき衣ひきさせて、「いま、秋風ふかん折ぞ来んとする。まてよ」といひおきてにげて去にけるもしらず、風の音を聞きしりて、八月ばかりになれば、「ちちよ、ちちよ」とはかなげになく、いみじう哀れなり。

ぬかづき虫、又あはれなり。さる心ちに道心おこして、つきありくらんよ。思ひかけずくらき所などに、ほとめきありきたるこそをかしけれ。

蠅こそにくき物のうちにいれつべく、愛敬なき物はあれ。人々しうかたきなどにすべき、物のおほきさにはあらねど、秋など、ただよろづの物に、顔などにぬれ足してゐるなどよ。

問一 傍線部①～⑧の用言について、品詞名、活用の種類、活用形を答えよ。一語の用言でないものには×と記せ。

①	②	③	④	⑤	⑥	⑦	⑧
く	き	な	な	な	な	な	な
く	き	な	な	な	な	な	な
く	き	な	な	な	な	な	な

問二 二重傍線部「ぬ」「ある」と同じ活用の種類の動詞を抜き出し、ひらがなで答えよ。またその活用形を答えよ。(活用の行は問わない。)

く	き	な	な	な	な
く	き	な	な	な	な

問三 蠅を気に入らない物のうちに入れるべきだと筆者が考える理由を、簡潔に二つ書け。

く	き	な	な	な	な
く	き	な	な	な	な

②

出典

「枕草子」(四〇段)

平安時代に成立した日本最古の随筆。作者の清少納言が、一条天皇の中宮定子に宮仕えをしていた頃の体験や回想などからなる。

重要単語

- ◇おにの生みたりければ＝鬼が生んだので。 糞虫みのむしの外形が鬼に似ているからという。
- ◇あやしき衣＝粗末な衣。父親が着せていた。
- ◇ぬかづき虫＝米つき虫のこと。「ぬかづく」は「額を地につけて拝む」の意。
- ◇さる心ちに＝そんな小さな虫の心で。
- ◇道心＝仏道への信心。
- ◇つきありく＝額ついて歩き回る。
- ◇ほとめきありき＝ことごと音を立てて歩き回り。
- ◇にくき＝気に入らない。嫌だ。
- ◇愛敬なき＝可愛げのない。
- ◇人々しう＝一人前のものとして。
- ◇かたき＝目の敵。
- ◇よろづの＝いろいろな。
- ◇ぬれ足して＝濡れたような足をして。

ポイント

問二 まず「ぬ」「ある」が何段活用かを考え、同じ活用をする別の動詞を探す。

問三 「蠅」について書かれている段落に注目する。